

「だから」と「それで」と「そこで」の使い分け

萩原孝恵

要 旨

本稿は、日本語学習者にとって難しい「だから」「それで」「そこで」という意味の類似した接続詞を取り上げ、どの接続詞を使うとどのような意味に解釈されるのかという観点で、その特徴と違いを論じた。まず先行研究で共通して述べられている特徴を整理し、それぞれの接続詞の枠組を規定した。その規定と先行研究における用例を基に、実際に学習者が書いた「だから」と「それで」と「そこで」の文を分析した。分析結果から、「だから」という接続詞がもたらす意味の効力、「だから」「それで」「そこで」に共通する特徴と違い、文の関係、前件・後件にくる内容を具体的に提示した。また、伝達される／解釈される意味の観点から「だから」の使い方を規定した。意味が重複する「それで」と「そこで」の使い分けについては、それぞれの接続詞を文の中で置き換えることによって検討し、文として成立するための条件と特徴を明示した。

【キーワード】 だから、それで、そこで、特徴、違い

1. はじめに

文章は書き手の伝達したい内容が読み手に正確に伝わらなければ意味がない。本稿は、「だから」「それで」「そこで」という意味の類似性を持つ接続詞について、どの接続詞を使うとどのような意味に解釈されるのかという観点で、その特徴と相違点を論じる。

接続詞「だから」「それで」「そこで」を改めて考え直すきっかけとなったのは、筆者が2005年度後期(10月～2月)に担当した作文クラスでの学生の質問に端を発している。この時の使用教材はアカデミック・ジャパニーズ研究会(編)(2001)『大学・大学院留学生の日本語 ②作文編』で、本稿で議論する接続詞の問題は第11課「解決策を述べる」で取り上げられている。この課では、接続表現の順接(「だから」「それで」など)・逆接(「でも」など)についてと、順接の接続詞(「そのため」「そこで」「したがって」)の使い方が練習課題として取り上げられ、文の関係と接続詞の使い方を学び、「解決策を述べる」文が書けるようになることが目標となっている。

しかし、次の例を見てみよう。(1-a)は前出の使用教材から「そこで」の説明の用例を引用したもので、(1-b)(1-c)は筆者が「そこで」の部分それぞれ「だから」「それで」に置き換えてみたものである。

- (1) アカデミック・ジャパニーズ研究会(編)(2001, 65): 「そこで」の用例から
- a. いくら待っても彼は来なかった。そこで、彼の家に電話をかけてみた。(引用文)
 - b. いくら待っても彼は来なかった。だから、彼の家に電話をかけてみた。(置き換え)
 - c. いくら待っても彼は来なかった。それで、彼の家に電話をかけてみた。(置き換え)

(1)の場合、(1-a)の「そこで」の文は、(1-b)の「だから」に置き換えても、(1-c)の「それで」に置き換えても、特に問題がない。これが本稿で議論しようとする問題である。つまり、(1-a)(1-b)(1-c)の具体的な意味の違いは何か。前の文と後の文との関係はどうなっているのか。どのように使い分ければよいのか、という問題である。日本語ネイティブであれば、(1-a)(1-b)(1-c)を難なく使い分けることが可能であるし、自分の伝えたい意味が最も伝えられる接続表現を理由なしに選択することもできる。しかし、日本語学習者にとってはそうではない。特に、成人の学習者の理解の助けには、何らかの理由付けや説明が必要である。そして、その理由付けや説明は、学習者それぞれが持つ既存の知識や認知にアクセスするようなものでなければならない、と筆者は考えている。

ところが、教える側は必ずしも適切な説明—学習者の既存の知識や認知にアクセスするような説明—ができるわけではない。なぜなら、日本語ネイティブの教師の場合、日本語がある意味自然に身に付いているようなところがあるため、いざ説明しようとする、うまく説明できないことも少なくないからである。

本稿では、学習者にとって使い分けが難しい「だから」と「それで」と「そこで」を取り上げ、その特徴及び違いを分析し説明する。まず第2節で、先行研究における記述から共通する特徴を整理し、それぞれの接続詞が持つ枠組を規定する。第3節で、先行研究の記述を参照しながら、実際に学習者が書いた文で、前件・後件の関係、意味の差異について考察する。第4節では、第3節で得られた考察結果から、「だから」と「それで」と「そこで」の特徴を再整理し、具体的な違いを提示する。まずは、先行研究でどのように「だから」と「それで」と「そこで」が取り上げられているのかを整理する。

2. 先行研究

2.1. 辞書による意味の記述

よくわからない、あるいは曖昧な意味の語に出くわした時、まず最初に調べるのが辞書である。そこで、接続詞「だから」「それで」「そこで」がどのように説明されているのかを、『広辞苑(第五版)』で調べた。意味の記述は、それぞれ次の通りである。

1) だから：前に述べた事柄が、後に述べる事柄の原因・理由になることを表す語。

そういうわけで。それゆえ。

2) それで：i. それだから。そういうわけで。

ii. そのようにして。そして。

3) そこで：i. それゆえ。それで。

ii. (話題を転ずる意) さて。

本稿で考察対象とするのは、「だから」と「それで」のiの意味と「そこで」のiの意味である。しかし一見してわかるように、それぞれの説明に使用されていることばには重複があり、これにより、身体的に身に付きたいわゆるネイティブの感がない学習者にとっては、かえって混乱することとなるのがこのような辞書の記述である。

2.2. 「だから」「それで」「そこで」に関する記述

次に、用例による説明をしている森田(1980)ⁱ、グループジャマシー(1998)ⁱⁱ、「それで」「だから」「したがって」の特徴を議論しているひげ(1987)ⁱⁱⁱ、誤用例文による説明・分析を行っている市川(2000)^{iv}、そしてアカデミック・ジャパニーズ研究会(編)(2001, 65)の「そこで」の記述から、先行研究において「だから」「それで」「そこで」がどのように説明されているのかを整理した結果が表1である。

表1 「だから」「それで」「そこで」のそれぞれの特徴

項目	「だから」 ^v	「それで」	「そこで」
a	【基本的な関係】 原因—理由(強い) *積極的に示す意識あり。	【基本的な関係】 原因—理由(弱い) *積極的に示す意識なし。	【基本的な関係】 原因—理由(弱い) *積極的に示す意識なし。
b	【前件と後件の関係】 因果関係あり。(帰結)	【前件と後件の関係】 成り行きの意味合い強。	【前件と後件の関係】 成り行きの意味合い強。
c	【前件の内容】 原因・理由・根拠・理屈・状態	【前件の内容】 事の真相・原因・きっかけ	【前件の内容】 状況・場面 *場面を示すだけで原因・理由とならない文もある。
d	【後件の内容】 ・話し手の判断・主張が強く現れる内容。	【後件の内容】 ・真相発見の気持ち。 ・前件を了解した上で行為への移行の原因・理由に重点が置かれる内容。	【後件の内容】 ・状況から移行後の行為に重点が置かれる内容。 ・改善・解決をするための行為。
e	【後件の文末表現】 ○意志表現、未来表現、事実を述べる文、依頼、勧誘等何れの文タイプでも可。	【後件の文末表現】 ×意志表現 ×未来表現	【後件の文末表現】 ×意志表現
f	【その他】 話しことば的・主観的。	【その他】 描写的・客観的。	【その他】 「その時点で」という意味。

*表中の「○」は「使用可能」、「×」は「使用不可」という意味を表している。

表1のaは基本的な関係で、何れも「原因—理由」という関係で前件と後件が接続する点は共通している。しかし、後件の理由が強く表され「原因—理由」を積極的に示す意識が働く「だから」に対し、「それで」「そこで」の場合、「だから」ほど「原因—理由」を積極的に示す意識が表れないと言及されている。

表1のbは前件と後件の関係で、「だから」は〈帰結〉の文とも呼ばれ、因果関係があるが、「それで」「そこで」の場合には、成り行き上そうになったという意味もあると説明されている。

表1のcとdは、前件と後件の具体的な内容である。

「だから」：S1（原因／理由／根拠／理屈／状態）。だから、S2（話し手の判断・主張）。

「それで」：S1（事の真相／原因）。それで、S2（真相発見／行為への移行の原因・理由）。

「そこで」：S1（状況／場面）。そこで、S2（状況から行為への移行／改善・解決の行為）。^{vi}

なお、理屈の文は（2）、行為への移行の原因・理由の文は（3-a）、状況から行為への移行の文は（3-b）である。

（2）理屈の文

九十九は三の倍数です。だから割り切れます。（森田1980, 225）

（3）^{vii} a. 行為への移行の原因・理由に重点 b. 状況から行為への移行に重点

a. 最近バンコクは住みにくいと言われている。それでコンケンに引っこすことにした。

b. 最近バンコクは住みにくいと言われている。そこでコンケンに引っこすことにした。

（市川2000, 88）^{viii}

表1のeは後件の文末表現についてである。「だから」はどのような文タイプであっても成立するが、「それで」「そこで」は意志を表す文末とは共起しにくいという指摘である。たとえば、（4）のような場合である。なお、文頭の「*」は非文を表す。

（4）意志表現

a. 腹が空いた。だから食べたい。（森田1980, 195）

b. *腹が空いた。それで食べたい。（森田の例文を筆者が置き換えたもの）

c. *腹が空いた。そこで食べたい。（ // ）

しかし、森田の（4-a）の文を「それで」「そこで」に置き換えると非文になり、特に（4-c）のように「そこで」に置き換えると、「そこで」の意味が場所を指示する意味が変わることがわかる。

また、（5）のような未来表現については、「それで」の場合、非文になる。

（5）未来表現

受付け時間は四時までです。だから急ぎましょう。（森田1980, 236）

*受付け時間は四時までです。それで急ぎましょう。^{ix}

最後に、表1のfはその他の特徴である。「だから」を使うと（6-a）の例のように主観的な理由を述べているように感じられるのに対し、「それで」を使うと（6-b）の例のように描写的・客観的な理由を述べているように感じられるという指摘である。（6）のもともとの文は（6-a）の方だが、

市川 (2000, 118) は「他の人や事柄についての叙述であるから、『だから』では落ち着かない。」とし、「だから」を「それで」に訂正している。

(6) a. 主観的 b. 描写的・客観的

a. 国では、日本製品が欧米製品より、人気があります。だから、日本の会社がだんだん増えてきました。(市川2000, 115)

b. 国では、日本製品が欧米製品より、人気があります。それで、日本の会社がだんだん増えてきました。(市川2000, 115)

以上、「だから」「それで」「そこで」について、先行研究の中で共通して述べられていた点及び重要なポイントだと思われる点を抜き出し、それぞれの語の特徴として整理した。これらの先行研究により浮かび上がった特徴としては、「だから」を使うと「理由が強く主張され、主観的に捉えている」といった感じになる」という点である。これは「それで」「そこで」にはない、「だから」の示差的な特徴だといえる。

しかし、「それで」「そこで」については説明が重なる部分も多く、「だから」と「それで」の違い、「そこで」の使い方についても、学習者の理解の助けとなるようなポイントは必ずしも示されているとはいえない。そこで本稿では、日本語学習者が書いた「だから」「それで」「そこで」の文を対象に、それぞれの接続詞が規定する文の関係、意味、差異について、先行研究を踏まえ、分析する。

3. 「だから」「それで」「そこで」の文の考察

本節では、筆者が担当した作文クラスで学習者が実際に書いた文を対象に、「だから」「それで」「そこで」のそれぞれの文について、それらが実際にどのような文の関係になっているのか、接続詞の違いによってどのように文の意味が変わるのか、といった点を中心に考察する。

3.1. 前件と後件の関係及び文の意味

考察対象は、書き手が前件を同じ文に設定して書かれた「だから」「それで」「そこで」の文^xである。

(7) a. 財布がなくなった。だから、買い物をしなかった。

b. 財布がなくなった。それで、身分証明書の再発行を申請した。

c. 財布がなくなった。そこで、その日に寄った場所を(→)行って見た。

(7-a) は典型的な〈帰結〉を表す文で、「財布をなくした」という原因により、「買い物をしなかった」という結果が導かれている、すなわち理由が述べられている。また「買い物をしなかった」という表現から、書き手の意志として「買い物をしない」という判断を下したという気持ちを読み取ることができる。(7-b) は、「財布をなくした」という原因により、その結果「身分証明書の再発行を申請する」という行為を強られることとなったという文の関係となり、前出(3-a)の‘行為への移

行の原因・理由に重点が置かれた’とする市川(2000)の「それで」の説明に一致する。また(7-c)は、「財布をなくした」という状況が生じたことにより、「その日に寄った場所に財布を探しに行く」という行為をしなければいけなくなったという文の関係となり、前出(3-b)の‘状況から移行後の行為に重点が置かれた’とする市川(2000)の「そこで」の説明にやはり一致する。

しかし、書き手(学習者)は果たして市川の説明にあるような意味で読み手に解釈されると理解していたであろうか。学習者にとって重要なことは、まず「だから」を使った場合と「それで」を使った場合と「そこで」を使った場合とでは表出される意味が違うということを理解すること、そして使い分けられるようになることである。この点を言及するためにはさらに「それで」「そこで」の特徴を検討する必要があるが、ここでは示差的特徴が現れた「だから」についてのみ整理をする。

■接続詞「だから」は、何か理由を述べる時で、その「原因—理由」を強く言いたい時に、書き手(話し手)は「だから」を選択するとよい。なぜならば、「だから」はその語の持つ意味効力が強く表出されるため、書き手の意思に関係なく後件の理由をより明示的にするという作用があるからである。

次に、(8)の例について考察する。

- (8) a. 風邪に(→を)ひいた。だから、出掛けずに部屋にいていた(→いた)。
 b. 風邪に(→を)ひいた。それで、病院に行った。
 c. 風邪に(→を)ひいた。そこで、薬を飲んだ。

(8-a)は、前件の「風邪をひいた」という原因により、自らの判断として「出掛けずに部屋にいる」という判断を下したのだという意味が「だから」の使用により自動的に明示される。(8-b)は、前件の原因により、後件の「病院に行く」という行為を選択したという解釈となる。この他、書き手は「病院に行く」という選択以外に「早く寝る」「薬を飲む」「勉強しない」等、個々の状況に基づいた様々な判断を下すことが可能であり、前件の原因を前提とした後件の行為であれば問題はない。(8-c)は、前件の状況が生じ、後件はその前件の状況の理由により「薬を飲む」ことを選択したという解釈と、表1 fに示した「その時点で」という「そこで」の意味を適応するならば、「風邪をひいたことを認識した時点(そこ)で、その状況を改善/解決するために薬を飲んだ」という解釈の可能性が想定される。以上の(8-b)(8-c)の解釈から、「そこで」が「それで」の意味に重なる、つまり類似した意味になってしまうことがあるという問題が出てくる。そこで、(8-b)(8-c)の「それで」「そこで」をそれぞれ置き換え、その特徴・違いをさらに検討してみよう。

- (8) b'. 風邪に(→を)ひいた。そこで、病院に行った。
 c'. 風邪に(→を)ひいた。それで、薬を飲んだ。

(8-b')(8-c')の違いは何か。既に(8-b)の例で説明したように、(8-c')は前件の原因により、個々人が風邪をひいた時に行ういくつかの選択肢の中から「薬を飲む」という選択をした—前件の原因を前提とした後件の行為—という関係で文が成り立っている。問題は(8-b')である。「そこで」が変わった途端に(8-c)同様に二つの解釈の可能性が出てくる。つまり、前件の状況が生じ、

その前件の事由により「病院へ行く」ことを選択したという解釈と、「風邪をひいたことを認識した時点（そこ）で、その状況を改善／解決するために病院へ行った」という二つの解釈である。このような複数の解釈の可能性は、「そこで」の使用が、学習上・指導上容易でないことを示唆している。

では、(9)の例について考察してみよう。

(9) a. 会社に解雇された。だから、仕事がなくなる。(→なくなった)。

b. 会社に解雇された。それで、失業者になった。

c. 会社に解雇された。そこで、新しい仕事をさがしている。(→さがしている)。

(9-a)は前件の「会社に解雇された」という原因により、「仕事がなくなった」という後件の内容を、「だから」を使うことにより、その理由をより強く主張しているのだと読み取れる。つまり既に何度も述べているが、それは「だから」の語の持つ効力だと指摘できる。書き手の主張、いわゆる伝えたいことを明示的に意図する語が「だから」という語なのである。(9-b)は、前件が原因で後件がその理由を述べている。「会社を解雇された」という事柄は必然的／自動的に「失業する」ということを意味する。これは誰がどう解釈しても揺るがない客観的事実であり主観ではない。この点は表1 f、(6-b)の例でも確認することができる。(9-c)は、前件の「会社に解雇された」という状況をきっかけに「新しい仕事をさがす」という行為をしなければならなくなったという表1 d、(3-d)の「そこで」の使われ方と同じ‘状況から移行後の行為に重点が置かれている’例であり、解決策として「新しい仕事をさがしている」とも読み取れる。この場合、(8-c)(8-b')のような複数の解釈は生まれえない。では、さらに考察を進めるために、前の例と同様に「それで」「そこで」の部分それぞれ置き換えてみよう。なお、文頭の「？」は不自然な文を表す。

(9) b'. ?会社に解雇された。そこで、失業者になった。

c'. 会社に解雇された。それで、新しい仕事をさがしている。(→さがしている)。

(9-c')は、前件が原因で、その結果「新しい仕事をさがしている」という理由を後件で述べている。文の関係は(9-b)と同じである。ところが(9-b')は、必ずしも非文とはいえないが不自然な文である。(9-b')が何か不自然だと感じる理由は、前件の「会社に解雇された」という内容が後件の「失業する」と同じ内容を意味するため、「そこで」で接続する文の関係の条件を満たせない。つまり、「会社に解雇された」という状況により、「そこで」の後では、その状況をきっかけにした何等かの改善／解決のための行為が描かれなければならないはずが、前件の状況を単に言い換えたに過ぎない表現が接続するためである。しかし、「会社に解雇された」その時点で「失業者になった」という時間的な軸で解釈される場合は、必ずしも不自然な文とはいえない。だが、本稿で議論している「原因一理由」を基本的な関係とする「そこで」の使用からは逸脱している。

以上、3.1.の考察結果を整理すると、次の6つの特徴を記述することができる。

- 1) 何れの接続詞も、前件と後件は何等かの因果関係が必要である。
- 2) 「だから」を使うと、書き手の意志・主張・判断が明示的になる。
- 3) 「それで」は、前件の原因を前提とした書き手の意志で選択できる行為が後件で表される。

- 4) 前件が原因で後件が結果の場合でそれが客観的な事柄の叙述の場合、「だから」ではなく「それで」をとる。
 - 5) 「そこで」は、前件が状況／場面を作り、後件は状況から行為へ移行する内容となる。
 - 6) 「そこで」は、ある内容を認識した時点(そこ)で、前件の状況／場面を改善／解決するための行為の内容が後件にくる。
- 一方未だ残っている問題がある。それは「それで」と「そこで」の違いである。

3.2. 「それで」と「そこで」の特徴及び違い

3.1. で、「それで」を「そこで」に置き換えることができた(8-b')、置き換えることができなかった(7-b')、不自然な文になった(9-b')が観察された。何が違うのか。本項では、この点について検討する。

- (8) b'. 風邪に(→を)ひいた。そこで、病院に行った。
- (7) b'. *財布がなくなった。そこで、身分証明書の再発行を申請した。
- (9) b'. ?会社に解雇された。そこで、失業者になった。

もう一度「それで」と「そこで」の前件と後件の文の関係と、特徴を整理してみよう。基本的には、前件で生じた原因により、その結果後件である行為をしたという意味を伝えたい時は「それで」、前件の状況／場面により、後件ではその前件で生じた状況／場面を改善／解決するための行為をしたと伝えたい時には「そこで」になる。また、「そこで」の場合、「前件の状況／場面が生じた時点」という意味も同時に表出する可能性があるが、後件は(8-b')のように前件がきっかけとなって行う意志的動作について述べる内容がくることに変わりがないので、この点を学習上・指導上しっかりと押さえておくべきである。たとえば(8-b')の場合には、「それで」の文の条件も「そこで」の文の条件も兼ね備えている。このような場合に、学習者はどちらを使ったらよいのか戸惑うだろう。しかし、「それで」と「そこで」には、前件に置くことができる内容と後件に置くことができる内容に具体的な違いがあり、さらに、伝えられる／解釈される内容(意味)にも差異が現れることから、書き手が伝えたい内容が何であるのかと、読み手にどのように解釈されるのか、といった両方の視点を提示し、具体的な例文による説明をすることが必要であろう。

次に、(7-b')が非文になった理由を考えてみよう。「そこで」の文の基本的な関係として、まず何等かの因果関係が必要である。しかし(7-b')の場合、前件の「財布がなくなった」という状況／場面から想定されるフレームから、後件の「身分証明書の再発行を申請した」という行為は通常呼ばれ出せない。それゆえ、前件と後件との意味の内容に関連性が見出せない。さらに、「そこで」の後には改善／解決の行為を表す文がくるという点でも、「財布がなくなった」ことを解決するために「身分証明書の再発行を申請する」行為は何も改善／解決されないことからこの条件も却下され、「そこで」の文としての条件を満たすことができず、結果として不成立となり非文となったと分析できる。しかし、「それで」の前件・後件を表す文の内容としては条件を満たすため、(7-b)では問題がなかった。

最後に、(9-b')が何か不自然だと感じる理由は、前件の内容と後件の内容が同じような意味を表出するため、「そこで」の文の成立条件を満たせないからだ指摘できる。つまり、「会社に解雇された」という状況により、「そこで」の後では、その状況をきっかけにした何等かの改善／解決のための行為が描かれなければならない、前件の状況を単に言い換えたに過ぎない(9-b')の文は不自然な文となると説明できる。

以上、本項で議論してきたことをまとめると、「それで」と「そこで」の特徴と違いは、次のようになる。

■共通する特徴 基本的に前件と後件の関係は「原因—理由」の関係にある。

■違い 「それで」は前件で生じた原因により、その結果後件である行為をしたという意味を表し、「そこで」は、前件の状況／場面により、後件ではその前件で生じた状況／場面を改善／解決するための行為をしたという意味を表す。

4. おわりに

本稿では、「だから」「それで」「そこで」の文の関係、前件・後件の具体的な内容、表出する／解釈される意味について、先行研究の記述を基に、学習者が書いた文を分析した。そして、先行研究において必ずしも明らかでなかった使い分けのポイントや重なりのある記述について、より具体的な特徴と違いを明示した。

【共通する特徴】

何れの接続詞も、前件と後件は何等かの因果関係が必要である。

【違い】

- 1) だから：書き手の意志・主張・判断が明示的になる。「だから」という語の持つ意味効力は、書き手の意思に関係なく、後件の内容をより明示的にする。
- 2) それで：前件の原因を前提とした書き手の意志で選択できる行為が後件で表される。
前件が原因で後件が結果の場合でそれが客観的な事柄の叙述の場合、「だから」ではなく「それで」になる。
- 3) そこで：前件は状況／場面で、後件ではその前件で生じた状況／場面をきっかけに、改善／解決するための意志的動作がくる場合には「そこで」になる。

学習者が「それで」と「そこで」のどちらの接続詞を使ったらよいか戸惑うような場合には、上記の特徴や違いを具体的な文で確認し、その上で書き手が伝えたい内容(意味)に合っているか、読み手にどのように解釈される可能性があるか、といった指導をしていくことが必要であろう。今後は、本稿で整理した「だから」「それで」「そこで」の特徴と違いを基礎研究とし、接続詞の語用的な役割を視ていきたいと思う。

注

- i. 森田 (1980) p.195, p.215, pp.224-225, pp.235-236からの引用。
- ii. グループジャマシー (編) (1998) pp.168-169, p.174, p.186からの引用。
- iii. ひけ (1987) pp.46-59から該当する部分を引用。
- iv. 市川 (2000) pp.61-62, pp.92-93, pp.117-119からの引用。
- v. 「だから」にはいくつかの用法があるが、本稿では「それで」「そこで」との混同という点で議論するため、〈帰結〉の用法に焦点を当てる。また、筆者が担当するクラスの受講者が目指しているものがアカデミック・ライティングであることから、本稿では、書きことばの使用 (文体は普通体) に限定し議論する。
- vi. S 1 は前件、S 2 は後件の文をそれぞれ表す。
- vii. 市川 (2000) から引用した例文については訂正後の文の方を掲載している。
- viii. 市川 (2000) は (3) の例の場合「それで」よりも「そこで」の方が適切とし、「それで」を「そこで」に訂正しているのだが、行為への移行の原因・理由の意味合いが強いため「それで」でも自然だとしている。しかし、状況から行為への移行に重点を置いて解釈したため「そこで」に訂正した、と市川 (2000, 93) は述べている。
- ix. 森田 (1980, 236) の例文では「それで急ごう」となっているが、本稿では、前文との文体の統一性を考え、「それで急ぎましょう」という形式に変更し引用している。
- x. 文中の「___」は誤用部分で、(→) 部分は筆者が訂正した箇所である。

参考文献

- (1) アカデミック・ジャパニーズ研究会 (編) (2001) 「第11課 解決策を述べる」『大学・大学院留学生の日本語②作文編』 pp.64-69. 東京：アルク。
- (2) Blakemore D. (1992) *Understanding Utterances: an introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. [武内道子、山崎英一 (訳) (1994) 『ひとは発話をどう理解するか』東京：ひつじ書房]
- (3) グループジャマシー (編) (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』東京：くろしお出版。
- (4) ひけひろし (1987) 「接続詞『それで』『だから』『したがって』」『教育国語』88号, pp.46-59. 東京：むぎ書房。
- (5) 市川保子 (2000) 『続・日本語誤用例文小辞典』東京：凡人社。
- (6) 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界—現代言語学から視る』東京：日本放送出版協会。
- (7) 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方』東京：角川書店。
- (8) 新村出 (編) (1988) 『広辞苑 (第五版)』東京：岩波書店。

How to Use Japanese Conjunctions ; *dakara, sorede* and *sokode*

HAGIWARA Takae

Abstract

It is difficult for learners of Japanese to distinguish Japanese similar conjunctions. This study investigates the three conjunctions *dakara*, *sorede*, and *sokode*, which have overlaps and differences in their features and meanings. I first examine the previous research on *dakara*, *sorede* and *sokode*, and compare how they connect the main-clause and the subordinate-clause. On the basis of the description, I analyze sentences containing *dakara*, *sorede* and *sokode* which were written by learners of Japanese in a writing course in the fall 2005 semester. The data show the common feature that each sentence using *dakara*, *sorede* and *sokode* has causation between the main-clause and the subordinate-clause. The data also indicate several different features: (1) that *dakara* represents the writer's/the speaker's assertion or attitude, even though he/she may not intend to convey it; (2) that *sorede* represents a cause in the main-clause, and manifests the writer's/the speaker's action which has been chosen from options in the subordinate-clause; and (3) that *sokode* represents a situation in the main-clause, and leads to an improvement or a solution accompanying an intention verb in the subordinate-clause.

【Key words】 *dakara*, *sorede*, *sokode*, features, differences